

琉球大学学術リポジトリ

女子短大生の「子ども観」と発達期待

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 當山, りえ, 石橋, 由美, 友利, 久子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1858

女子短大生の「子ども観」と発達期待

○嘉数 朝子・當山 りえ・石橋 由美・友利 久子
(琉球大学) (新見女子短期大学) (日本教育総合研究所)

Women's College Students' Perceptions of Children and Developmental Expectation

要 約

本研究は、沖縄・愛媛・岡山・東京の女子短大生429名を対象とし、①お稽古事の数や開始年齢(回答者自身のお稽古事・将来子どもに望むお稽古事)・発達期待・「子ども観」尺度の地域差、②地域別のお稽古事・発達期待・「子ども観」尺度の関連を検討することを目的とした。

地域差を検討した結果、回答者自身の経験したお稽古事数は東京が一番多く、沖縄が最も少なかった。しかし、子どもに望むお稽古事数は沖縄が最も多く、またお稽古事の開始年齢も最も早かった。発達期待に関しても、沖縄は早期達成を期待していた。

各尺度の関連を検討したところ、お稽古事・発達期待と「子ども観」の関連は弱かったが、お稽古事と発達期待は関連が深いことが示された。

背景と目的

今日の日本社会では、幼児期からのお稽古事や文字指導や音楽教育、スポーツなど、多様な早期教育が広く行われている。これを支える「できるだけ早いうちに教育をはじめ、子どもの発達を促進しようとする」立場を裏付ける理論として、多湖(1978)は次の3点をあげている。①従来、乳幼児は無能であると考えられてきたが、実は有能であり、教育可能性に富んでいることがわかってきた。②初期発達の重要性の発見。③乳幼児期における貧困な環境が将来回復不可能な損失をもたらすこと(米国における文化的剝奪児の例など)。これに対して伝統的乳幼児観は「幼児期には、知的発達よりも基本的な生活習慣や社会性の形成を優先すべきである」と主張する。

大人(教師や親)の子どもへの対応の違いの一因として、暗黙の子ども観があることが知られている。したがって、早期教育を推進する立場にしろ、批判的な立場にしろ、その主張の背後には、子どもという存在をどう認識するかという「子ども観」が深く関わっていると推察される。本研究では「子ども観」と早期教育についての考えとの関連を検討する。島袋ら(1998)は、保育科短大生を対象として、「子ども観」尺度の因子分

析を行った。見いだされた因子は以下の通りである：価値体系4因子(第1因子「立身出世」・第2因子「親族主義」・第3因子「開放性」・第4因子「自己制御」)；概念体系6因子(第1因子「可能性」・第2因子「否定的」・第3因子「あてになる存在」・第4因子「一個の人間」・第5因子「未熟な存在」・第6因子「理解可能な存在」)。「子ども観」を構成する各因子と早期教育についての考えとの間には次のような関係が考えられる。例えば、幼児期は可塑性にとんでおり(概念体系第1因子「可能性」、指導可能なものである(概念体系第6因子「理解可能な存在」という「子ども観」を持つ者は早期教育には肯定的であろう。また「立身出世」という価値体系を強く支持する者も、早期教育には肯定的であろう。逆に子どもをのびのび育てたいという考えを持っている者(価値体系第3因子「開放性」)は早期教育に否定的であろうと予測される。

早期教育に密接な関連を持つものに発達期待がある。これは、母親が色々な行動(例：一人で食事ができる、電話がかけられる等)をいつ頃までに達成されていたらよいとするかという期待のことである。東ら(1981)は、日米の母親の発達期待を比較したが、その結果両文化において期待される領域が異なっていた。例えば、日本では

従順さや情緒的成熟の領域を早く発達して欲しいと期待するのに対し、米国では言語による自己主張や社会的スキルの方を早く達成してほしいと期待していた。発達期待の領域には様々なものがあるが、本研究では学習面と生活面の領域のみをとりあげる。学習面での発達期待は、早期教育の考えと深い関連を示すだろう。

早期教育に影響する環境要因としては、都市化の程度も大きいのではないか。都市化が進展しているほど、個人の能力開発への期待が強いため、早期教育の時期は早く、種類も多様であると予想される。著者らの在住する沖縄県と、最も都市化の進んでいる東京都近郊、地方都市のサンプルとして愛媛県、岡山県の計4地域を対象とした。どの地域も短大の保育科ということでは共通している。

早期教育に影響するその他の要因としては、母親自身の経験も大きいと思われる。母親が受けた早期教育の種類や時期などは将来自分の子どもに受けさせたい教育の種類や時期に影響するだろう。その際、影響の方向としては、次の2つが考えられる。類似性と相補性である。類似性は母親が受けたことと類似してくる影響である。相補性とは、例えば母親が幼い時から多数の早期教育を受けさせられたことに不満を持っていた場合、子どもには緩やかな教育をしようとする。逆に、幼い頃、自分が受けることができなかった者は、自分の子どもには早いうちから早期教育を実施したいと思う。このように自分の経験とは逆の影響を与えることを相補性とする。

本研究では、将来母親になる可能性の高い保育科短大生を対象として、早期教育の経験とそれに対する考え（自分が経験したお稽古事、将来自分の子どもに望むお稽古事）、発達期待、「子ども観」との関連について検討する。

方法

1. 調査対象：沖縄県K短期大学保育科2年生女子117名、愛媛県S女子大学保育科1・2年生女子99名、岡山県N女子短期大学保育科1・2年生女子98名、東京都S女子短期大学保育科1・2年生115名、合計429名
2. 調査時期：1997年10月中旬から11月上旬
3. 調査尺度

1) お稽古事の数と開始年齢：調査対象者の早期教育についての経験と考えを知るためにどのようなお稽古事をしていたのか、またそれはいつ頃始めたのかについて自由記述させた。さらに、将来子どもにお稽古事を勧めるとしたら何を勧めるのか、いつ頃から始めてもらいたいかについても自由記述させた。

2) 発達期待尺度（学習発達期待6項目、生活発達期待4項目）：東ら（1981）の「母親の発達期待測定」の項目から、学習面の期待と生活面の期待を参考に作成した（付表参照）。それぞれの項目について何歳頃までに習得して欲しいかを「幼稚園頃までに（1点）」、「小学校入学までに（2点）」、「小学校入学以降（3点）」の3件法で回答を求めた。

3) 子ども観尺度（価値体系4因子・概念体系6因子）：島袋ら（1998）

①価値体系16項目：第1因子「立身出世（例：将来は安定した生活ができるようにいい職業に就いてほしい・将来は社会的地位の高い人になってほしい）」、第2因子「親族主義（例：子どもの人間性を育むためには、祖父母との関係が大切だ・親戚との付き合いが大切だ）」、第3因子「開放性（例：子どもにとって誰とでも仲良くできることは大切だ・子どものうちは勉強よりも思いきり遊んでほしい）」、第4因子「自己制御（例：友達ともめ事を起こしてでも、自己主張をすることは大切だ・友達と仲良くするために、自分を抑えることも必要だ）」。

②概念体系38項目：第1因子「可能性（例：子どもは素晴らしい力をもっている・あらゆる可能性をもっている）」、第2因子「否定的（例：子どもはうるさい・生意気だ）」、第3因子「あてになる存在（例：子どもは家庭の稼ぎ手として役に立つ存在だ・老後の経済的な支えになるものだ）」、第4因子「一個の人間（例：子どもは親の保護なしでは生きていけない・一人で生きていけない）」、第5因子「未熟な存在（例：子どもは未熟である・不完全である）」、第6因子「理解可能な存在（例：子どもでも説明すればどんなことでも理解できる）」。それぞれの項目について「非常にあてはまる（5点）」から「全くあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

結果と考察

1. お稽古事（数・開始年齢）の地域比較

①お稽古事の地域差

回答者の経験したお稽古事の数とお稽古事を始めた最低年齢、将来子どもに勧めたいお稽古事の数とその最低開始年齢の地域差について1要因の分散分析を行った（表1）。その結果、回答者のお稽古事の数と子どもに勧めたいお稽古事の数・最低開始年齢に有意差が得られ、回答者自身の最低開始年齢に有意差は得られなかった。下位検定の結果、回答者のお稽古事の数と得点は東京が他の地域よりも有意に高かった。これから、東京の学生は他の3地域よりもお稽古事を多く経験していることが分かった。

表1 お稽古事（数・開始年齢）の地域差

		全体	沖縄	愛媛	岡山	東京	F 値
回答者の経験した稽古数	平均 S D	2.25 (1.17)	2.04 (1.22)	2.39 (1.15)	2.39 (1.09)	2.97 (1.08)	7.22*** 東京>沖縄・愛媛・岡山
最低開始年齢	平均 S D	6.15 (1.80)	6.36 (1.51)	5.99 (2.03)	6.19 (1.96)	6.04 (1.71)	0.86
子どもに経験させたい稽古数	平均 S D	1.29 (1.00)	1.62 (1.05)	1.00 (0.92)	1.11 (0.09)	1.37 (0.98)	8.81*** 沖>愛・岡,愛<東
始めさせたい年齢（子ども）	平均 S D	5.61 (1.44)	5.24 (1.37)	5.43 (1.52)	5.84 (1.24)	6.01 (1.49)	5.48*** 沖<岡・東

***p < .01 ***p < .001

②お稽古事の種類

地域別に回答者の経験したお稽古事と子どもに勧めたいお稽古事の種類を表2に示した。回答者の経験したお稽古事はどの地域でも、ピアノ・

また、子どもに勧めたいお稽古事の数と得点は沖縄が愛媛・岡山よりも高く、東京は愛媛よりも高かった。沖縄の学生は愛媛・岡山の学生よりも、東京の学生は愛媛の学生より、子どもに多くのお稽古事をしてほしいと望んでいることが分かった。

子どもの最低開始年齢の得点は沖縄が岡山・東京よりも低く、沖縄の学生は岡山・東京の学生に比べて早期から（年齢が低いうちから）お稽古事を始めてほしいと考えていることが分かった。

これらの結果から、回答者である大学生の世代では、都市化の程度が大きい東京の子どもたちが他の地域の子どものよりも様々なお稽古事をしてきたが、自分たちの子どもへのお稽古事に対する希望は沖縄の方が最も高いといえるだろう。

書道・そろばん・水泳・学習塾が上位を占めていた。また、沖縄を除く3地域で子どもに勧めたいお稽古事の数、回答者自身の経験したその数よりも少なかった。

表2 地域別のお稽古事の種類

＜沖縄県＞						＜愛媛県＞					
稽古事の種類	学生	子ども	稽古事の種類	学生	子ども	稽古事の種類	学生	子ども	稽古事の種類	学生	子ども
ピアノ	64	68	茶道	1		ピアノ	61	50	日本舞踊	2	
書道	53	19	学研	1		書道	47	8	絵画教室	1	
そろばん	48	8	琴	1	1	そろばん	35		バレエ	1	6
公文	30	5	日本舞踊	1		学習塾	27		体操教室	1	1
水泳	29	32	スポーツ	1	3	水泳	19	14	リトミック	1	
学習塾	19	1	語学		17	エレクトーン	14	1	歌	1	
エレクトーン	9		楽器		4	公文	6		劇団	1	
英語	8		バイオリン		2	武道	6	3	フルート	1	
琉球舞踊	4	4	体操		1	英語	3	1	スポーツ		7
フルート	3	1	空手		1	バスケット	3		バイオリン		1
剣道	2	1	柔道		1	ダンス	3	5	乗馬		1
バレエ	1	9	ダンス		1						
生け花	1										

〈岡山県〉

稽古事の種類	学生	子ども	稽古事の種類	学生	子ども
ピアノ	62	58	ミニバスケット	1	
書道	52	21	民謡	1	
そろばん	40	4	琴	1	
エレクトーン	11		英数塾	1	
学習塾	11	1	体操教室	1	
水泳	11	7	日本舞踊	1	
英語	6	1	華道	1	
公文	5	1	茶道	1	
剣道	4		バレエ		3
硬筆	4	2	スポーツ		3
算数教室	3		空手		1
合唱	2		ダンス		1
オルガン	2		歌		1
バレエ	2		野球		1
英会話	2	1	バイオリン		1

〈東京都〉

稽古事の種類	学生	子ども	稽古事の種類	学生	子ども
ピアノ	68	61	日本舞踊	2	
書道	63	28	剣道	2	
水泳	54	33	空手	1	
そろばん	45	3	手話	1	
学習塾	31	3	演劇	1	
英語(英会話)	17	6	器械体操	1	
エレクトーン	16	1	バトン	1	
公文	12	1	ガールスカウト	1	1
バレエ	7	3	バイオリン		3
スポーツ	6	9	体操(新体操)		2
絵画教室	4	1	ダンス		1
硬筆	2				

③回答者のお稽古事(数・開始年齢)と子どもに勧めたいお稽古事(数・開始年齢)の関連

回答者のお稽古事と子どもに期待するお稽古事との関連を検討するため、全体と地域別に相関係数を算出した(表3-1~3-5)。

全体の結果からみると、まず回答者の経験したお稽古事の数と開始年齢の間に有意な負の相関が得られた。このことから、お稽古事の数が多い回答者ほど年齢が低いうちから始めていたことが分かった。また、回答者と子どものお稽古事数の間に有意な正の相関が得られたことから、自分自身が多くお稽古事をしていた回答者は子どもにも同じように多くのお稽古事を勧めたいと考えていることが分かった。回答者と子どもの開始年齢の間にも有意な正の相関が得られ、自分が早いうちからお稽古事をしていた者は、子どもにも早期から始めさせたいと考えていることが分かった。子どもに勧めたいお稽古事の数と開始年齢の間には有意な負の相関が得られ、子どもに勧めたいお稽古事の数が多いほどその開始年齢も低いことが分かった。

地域別にみると、愛媛・岡山・東京で、回答者のお稽古事の数と開始年齢に有意な負の相関がみられ、全体と類似した結果が得られた。また、沖縄・愛媛・岡山で、回答者と子どものお稽古事の数に有意な正の相関が得られ、全体と類似した結果であった。回答者の開始年齢と子どもに勧めたいお稽古事数は岡山・東京で全体と同様に正の相関が得られた。

これらの結果より、自分自身のお稽古事の実験は、将来の子どもへのお稽古事の期待と密接に関

連している事が分かった。また、自分の経験が子どもの将来のお稽古事への期待に与える影響の方向としては相補性ではなく、類似性をもっているといえる。これは、子育ての方法の世代間伝達を示しているといえよう。

表3-1 回答者のお稽古事と子どものお稽古事の相関(全体)

	①	②	③	④
① 稽古数(学生)				
② 年齢(学生)		-.331***	.218***	
③ 稽古数(子ども)				.231***
④ 年齢(子ども)				-.125*

*p<.05,***p<.001

表3-2 回答者のお稽古事と子どものお稽古事の相関(沖縄)

	①	②	③	④
① 稽古数(学生)				
② 年齢(学生)				
③ 稽古数(子ども)			.278***	
④ 年齢(子ども)				

***p<.001

表3-3 回答者のお稽古事と子どものお稽古事の相関(愛媛)

	①	②	③	④
① 稽古数(学生)				
② 年齢(学生)		-.254*	.314**	
③ 稽古数(子ども)				
④ 年齢(子ども)				

*p<.05,**p<.01

表3-4 回答者のお稽古事と子どものお稽古事の相関(岡山)

	①	②	③	④
① 稽古数(学生)				
② 年齢(学生)		-.417***	.241*	
③ 稽古数(子ども)				.309*
④ 年齢(子ども)				

*p<.05,***p<.001

表3-5 回答者のお稽古事と子どものお稽古事の相関(東京)

	①	②	③	④
① 稽古数(学生)				
② 年齢(学生)		-.519***		
③ 稽古数(子ども)				.302**
④ 年齢(子ども)				

p<.01,*p<.001

2. 発達期待の地域比較

発達期待の地域差について1要因の分散分析を行った(表4)。

その結果、学習発達期待・生活発達期待・発達期待合計ともに有意差が得られた。それぞれの下位検定の結果、どの期待においても東京の得点が他の3地域よりも有意に高く、また岡山の得点が

沖縄より高かった。この結果より、東京は他の地域より学習面・生活面の発達課題について、ゆっくり習得してよいと考えていることが分かった。また沖縄は岡山に比べて、学習面・生活面ともに早期に課題を習得するよう期待していることが分かった。

表4 発達期待の地域差

		全 体	沖 縄	愛 媛	岡 山	東 京	F 値
学 習 発 達 期 待	平均	12.40	11.32	11.89	12.70	13.68	18.98***
	S D	(2.64)	(2.57)	(2.73)	(2.51)	(2.11)	東>沖・愛・岡、沖<岡
生 活 発 達 期 待	平均	8.19	7.54	7.85	8.29	9.04	13.02***
	S D	(1.99)	(2.09)	(1.95)	(1.95)	(1.60)	東>沖・愛・岡、沖<岡
発 達 期 待 合 計	平均	20.59	18.88	19.75	20.99	22.71	21.84***
	S D	(4.04)	(3.95)	(4.23)	(3.71)	(3.13)	東>沖・愛・岡、沖<岡

p<.01 *p<.001

3. お稽古事と発達期待の関連

お稽古事と発達期待の関連を検討するために、全体と地域別に相関係数を算出した(表5-1~5-4)。

その結果を全体からみてみると、子どもに勧めたいお稽古事の数と学習発達期待・発達期待合計の間に有意な負の相関が得られた。このことから、子どもに多くのお稽古事をしてほしいと考えている者ほど発達全般、とりわけ学習面での早期達成を望んでいることが分かった。子どものお稽古事の最低開始年齢と生活発達期待・発達期待合計の間には有意な正の相関が得られた。このことは子どもに早期からお稽古事をしてほしいと考えている者は、発達全般、とりわけ生活面での早期達成を期待しているということである。

地域別にみてみると、愛媛と岡山で、全体と同様に子どもに勧めたいお稽古事の数と学習発達期

待・発達期待合計の間に有意な負の相関が得られた。また、回答者のお稽古事の数と生活発達期待の間に、岡山では有意な正の相関が、東京では有意な負の相関が得られた。これから、岡山では自分が多くのお稽古事を経験した者ほど、子どもの生活面の発達はゆっくりでいいと考えているのに対し、東京は逆に多くのお稽古事を経験した者ほど子どもに対し生活面の発達課題を早く達成してほしいと考えていることが分かった。

これらの結果から、全体・愛媛・岡山・東京では発達期待とお稽古事の関連性がみられたが、沖縄は関連性がみられなかった。お稽古事などの早期教育は学習面での発達期待と深い関連が得られるだろうとの予測と一致した結果が得られたが、生活面の発達期待とも関連がみられた。また、岡山と東京ではお稽古事と生活期待の間に逆の関連がみられたことも興味深い結果であろう。

表5-1 お稽古事と発達期待の相関(全体)

	学習期待	生活期待	発達期待合計
①稽古数(学生)			
②最低開始年齢(学生)			
③稽古数(子ども)	-.140**		-.333**
④最低開始年齢(子ども)		.130*	.133*

*p<.05,**p<.01

表5-2 お稽古事と発達期待の相関(愛媛)

	学習期待	生活期待	発達期待合計
①稽古数(学生)			
②最低開始年齢(学生)			
③稽古数(子ども)	-.259**		-.259*
④最低開始年齢(子ども)			

*p<.05,**p<.01

表5-3 お稽古事と発達期待の相関(岡山)

	学習期待	生活期待	発達期待合計
①稽古数(学生)		.208*	
②最低開始年齢(学生)			
③稽古数(子ども)	-.237*		-.204*
④最低開始年齢(子ども)			

*p<.05

表5-4 お稽古事と発達期待の相関(東京)

	学習期待	生活期待	発達期待合計
①稽古数(学生)		-.206*	
②最低開始年齢(学生)			
③稽古数(子ども)			
④最低開始年齢(子ども)			

*p<.05

4. 子ども観の地域比較

子ども観の各因子の地域差について1要因の分散分析を行った(表6-1、6-2)。

その結果、地域差が得られたのは、価値体系の第1因子「立身出世」、第2因子「親族主義」、第3因子「開放性」、概念体系の第1因子「可能性」、第3因子「当てになる存在」、第5因子

「未熟な存在」、第6因子「理解可能な存在」だった。それぞれの下位検定の結果は以下の通りである。

価値体系第1因子「立身出世」は、愛媛の得点が岡山・東京より有意に高かった。愛媛の学生は岡山・東京に比べて、子どもに将来いい職業に就いてほしい、親に楽をさせてほしいと考えている

表6-1 価値体系の平均値の地域差

		全体	沖縄	愛媛	岡山	東京	F 値
F 1	平均	15.57	15.97	16.57	14.95	14.88	7.10***
立身出世	SD	(3.17)	(3.00)	(2.90)	(3.17)	(3.26)	愛媛>岡山・東京
F 2	平均	17.91	18.83	18.07	16.71	17.88	12.43***
親族主義	SD	(2.63)	(2.20)	(2.82)	(2.61)	(2.49)	岡<沖・愛・東・沖>東
F 3	平均	12.68	13.03	12.75	12.36	12.54	4.19**
開放性	SD	(1.49)	(1.51)	(1.57)	(1.32)	(1.46)	沖縄>岡山
F 4	平均	10.82	10.89	10.92	10.68	10.79	0.41
自己制御	SD	(1.67)	(1.68)	(2.00)	(1.41)	(1.55)	

p<.01 *p<.001

表6-2 概念体系の平均値の地域差

		全体	沖縄	愛媛	岡山	東京	F 値
F 1	平均	70.98	73.23	68.86	70.02	71.37	8.92***
可能性	SD	(6.55)	(5.58)	(7.75)	(6.37)	(5.71)	沖>愛・岡,東>愛
F 2	平均	10.01	9.79	10.17	10.43	9.75	0.87
否定的	SD	(3.55)	(3.72)	(3.33)	(3.37)	(3.65)	
F 3	平均	18.32	19.21	19.28	17.33	17.47	8.42***
当てになる存在	SD	(3.86)	(3.97)	(4.06)	(3.51)	(3.41)	沖>岡・東,愛>岡・東
F 4	平均	19.52	19.93	19.23	19.02	19.80	2.71
一個の人間	SD	(2.73)	(2.60)	(3.08)	(2.38)	(2.74)	
F 5	平均	15.06	15.72	14.65	14.38	15.33	7.90***
未熟な存在	SD	(2.31)	(2.47)	(2.14)	(2.28)	(2.07)	沖>愛・岡,東>岡
F 6	平均	9.41	9.89	9.53	9.00	9.17	5.10**
理解可能	SD	(1.85)	(1.79)	(1.70)	(1.63)	(2.08)	沖縄>岡山・東京

p<.01 *p<.001

ことが分かった。

価値体系第2因子「親族主義」は、岡山の得点は他の3地域に比べて有意に低く、沖縄は東京に比べて高いという結果だった。このことから、岡山の学生は子どもの人間性のためには祖父母との関係や親戚との付き合いが大切だという意識が沖縄・愛媛・東京より低いこと、沖縄は東京より親族主義的であることが分かった。

価値体系第3因子「開放性」では、沖縄の得点が岡山より有意に高く、沖縄の学生は協調性のある伸び伸びとした子どもに育ててほしいと考えていることが分かった。

概念体系第1因子「可能性」は、沖縄の得点が愛媛・岡山に比べて有意に高く、東京の得点が愛媛よりも高かった。このことから、沖縄の学生は愛媛・岡山よりも、また東京の学生は愛媛よりも、子どもを可能性をもった存在と捉えていることが分かった。

概念体系第3因子「あてになる存在」では、沖縄と愛媛の得点が岡山・東京よりも有意に高かった。沖縄と愛媛の学生は岡山・東京よりも、将来親を経済的に支え忠孝を尽くす可能性をもった存在として子どもを捉えていることが分かった。

概念体系第5因子「未熟な存在」は、沖縄の得点が愛媛・岡山よりも有意に高く、東京が岡山よりも有意に高かった。このことから、沖縄の学生は愛媛・岡山より、また東京の学生は岡山より、子どもを未熟で不完全な存在だと考えていることが分かった。

概念体系第6因子「理解可能な存在」は、沖縄の得点が岡山・東京よりも有意に高かった。沖縄の学生は、岡山・東京に比べて、子どもでも説明すればどんなことも理解できる教育可能な存在だと捉えていることが分かった。

5. お稽古事と子ども観の関連

お稽古事と子ども観の関連を検討するために、相関係数を算出した(表7-1~7-3)。その結果、全体・愛媛で有意な相関が得られたが、沖縄・岡山・東京では有意な相関は得られなかった。全体の相関値は有意にはなったものの、大変低い値($r=.120\sim.155$)であった。愛媛で子どもの開始年齢と価値体系第1因子「立身出世」の間に

正の相関($r=.279$)が得られ、愛媛では子どもに立身出世を望む者はお稽古事の開始はゆっくりでいいと考えていることが分かった。

これらの結果から、お稽古事の数・開始年齢と子ども観の関連は弱いといえるだろう。

表7-1 お稽古事と子ども観(価値体系)の相関
《全体》

価値体系	F1 立身出世	F2 親族主義	F3 開放性	F4 自己制御
稽古数 (学生)				
年齢 (学生)				
稽古数 (子ども)	.149**	.133**		
年齢 (子ども)				

** $p<.01$

表7-2 お稽古事と子ども観(価値体系)の相関
《愛媛県》

価値体系	F1 立身出世	F2 親族主義	F3 開放性	F4 自己制御
稽古数 (学生)				
年齢 (学生)				
稽古数 (子ども)				
年齢 (子ども)	.279*			

* $p<.05$

表7-3 お稽古事と子ども観(概念体系)の相関
《全体》

概念体系	F1 可能性	F2 否定的	F3 当てに なる存在	F4 一個の 人間	F5 未熟な 存在	F6 理解 可能
稽古数 (学生)						
年齢 (学生)						
稽古数 (子ども)			.155**		.120*	
年齢 (子ども)						

* $p<.05$, ** $p<.01$

6. 発達期待と子ども観の関連

発達期待と子ども観の関連を検討するために、相関係数を算出した(表8-1~8-5)。その結果、全体と愛媛・東京で有意な相関が得られたが、相関値は大変低いものであった。3つに共通していた相関関係は、学習発達期待と価値体系第1因子「立身出世」の間に得られた負の相関関係であった。また、沖縄・岡山では有意な相関関係は得られなかった。これらの結果から、子どもに立身出世を望む者は学習面の発達課題を早期に達成してほしいと期待していることが分かったが、

全体的に発達期待と子ども観の関連は弱いといつてよいだろう。

表8-1 発達期待と子ども観(概念体系)の相関
《全体》

概念体系	F1 可能性	F2 否定的	F3 当てにな る存在	F4 一個の 人間	F5 未熟な 存在	F6 理 解 可 能
学習発達期待			-.129**			-.132**
生活発達期待						
発達期待合計						-.128**

**p<.01

表8-2 発達期待と子ども観(概念体系)の相関
《東京》

概念体系	F1 可能性	F2 否定的	F3 当てにな る存在	F4 一個の 人間	F5 未熟な 存在	F6 理 解 可 能
学習発達期待			-.192*			
生活発達期待						
発達期待合計		-.217*				

*p<.05

表8-3 発達期待と子ども観(価値体系)の相関
《全体》

価値体系	F1 立身出世	F2 親族主義	F3 開 放 性	F4 自 己 制 御
学習発達期待	-.210***			
生活発達期待				
発達期待合計	-.181***			

***p<.001

表8-4 発達期待と子ども観(価値体系)の相関
《愛媛》

価値体系	F1 立身出世	F2 親族主義	F3 開 放 性	F4 自 己 制 御
学習発達期待	-.262*		.199*	
生活発達期待				
発達期待合計			.199*	

***p<.001

表8-5 発達期待と子ども観(価値体系)の相関
《東京》

価値体系	F1 立身出世	F2 親族主義	F3 開 放 性	F4 自 己 制 御
学習発達期待	-.269**			
生活発達期待				
発達期待合計	-.252**			

**p<.01

総合的考察

本研究では、将来子どもにさせたいお稽古事の数や開始年齢は回答者自身の経験や発達期待と関連が深いことが示された。またお稽古事に対する意識や発達期待はともに子ども観との関連は弱いものの、子ども自身の将来の社会的・経済的安定と立身出世を望み、そして、親の老後の経済的支えと忠孝を子どもに期待する者は、子どもにお稽古事をより多く勧め、より早期の発達課題達成を期待する傾向が全体としてみられた。

中教審の「幼児の心の教育に関する小委員会」で、早期教育の現状・課題について、汐見稔幸氏による意見発表が行われた。「早期教育自体の影響よりも、それが行われる時の親子の変化や、親の子に対する期待の変化がもたらす影響が心配」とする汐見氏の意見は、早期教育の内容自体よりも、早期教育によってもたらされる親子関係の在り方が子どもの心の育ちに与える影響に対して警

鐘を鳴らしたといえる（週間教育PRO、1998、2/10、P37）。

本研究の結果からも、早期教育（お稽古事）への意識は発達期待と関連が深いことが示唆された。「早く、急いで」できるようになることをせかされる現代の子どもが浮き彫りにされ、憂慮される。

また、本研究では早期教育に影響する要因として都市化の影響や地域差を考えたが、沖縄と東京で興味深い結果が得られた。回答者自身の経験したお稽古事の数は予想通り東京が一番多く、沖縄は最も少なかった。しかし、子どもに勧めたいお稽古事の数は沖縄が最も多く、開始年齢も最も早かった。発達期待に関しても、沖縄は他の3地域よりも早期の達成を期待していたが、東京では「ゆっくりでいい」としていた。

東京で暮らす保育科短大生は、彼女達自身が多のお稽古事をより早期から経験している。個人の能力、つまり「できる力やわかる力」を売って賃金を得、生計を立てるべく競争に駆り立てられる資本主義社会で、子ども時代から能力開発としてお稽古事を経験してきた彼女達が、自分自身得られなかったものをわが子に補償したいと考える。それは、都市化され個人化された現代社会における子ども達の「生きにくさ」の原因をそこに求め、子どもの肯定的可能性を信じ、個人主義の思想に基づいて子どもにも一個の独立した人格とその価値を認め、幼児期固有の発達課題と未熟性を考慮するからではないだろうか。お稽古事を多く経験した東京の学生が、子どもに対して学習面ではなく生活面での発達の早期達成を期待する傾向も、彼女達自身の子ども時代と都市化・個人化の進行した現代社会への批判的意見を反映していると考えられる。しかし幼児期の生活面での自立は、就学後の学業成績と関係するという見解もあるので、これは幼児期の発達段階と発達課題を考慮した意見かもしれない。

他方、沖縄の保育科短大生は、彼女達自身の経験したお稽古事の数は少ないにも関わらず、お稽古事を早い時期から、しかも数多く子どもに勧めたいと考え、学習・生活両面での発達課題の早期達成を期待していた。これは東京の場合と同様に、自分自身の経験の補償とも考えられる。しかし、社会文化的状況の差異を考えると、この結果を個人的要因だけで説明するのは不十分である。沖縄

で主流となっている子ども観は、個人主義ではなく、「同胞主義」である（友利、1995）。本研究でも示されたように、子どもを家族という枠組みに組み込まれた存在として認識し、家族、親戚、地域での人間関係を重視する「親族主義」の傾向が、他の地域に比べて強い。都市化・個人化された地域とは対照的に、家族・親戚を中心とした社会的関係の比較的強い中で生活し、地域の教育力が保持されているからこそ、子どもの肯定的可能性と教育可能性を信じ、能力の早期開発を率直に期待できるのではないだろうか。沖縄の場合、親の将来の経済的支えとなる「当てになる存在」として子どもを捉える傾向が強い。したがって沖縄のお稽古事に反映された子どもの早期能力開発への期待は、個人主義的価値観の反映というよりは、「親族主義」的価値観を背後から支え、補完していると考えられる。

今後の課題

本研究では女子短大生を対象にしたが、子育て中の母親を対象にした研究も必要であろう。母親を対象にした場合、子ども観や発達期待の間に密接な関係が示され、また地域差も大きくなると思われる。

参考・引用文献

- 東洋 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達
東京大学出版
- 国吉和子 1990 大学生・看護学校生の価値観の変化
沖縄大学紀要, 7, 199-211.
- 永澤道代 1996 母親の子ども観と養育態度の関係
追手門学院大学心理学論集, 4, 11-21.
- 島袋恒男 1998 女子短大学生の「子ども観」に関する研究(2)―保育職志望度と地域特性との関連で―
琉球大学教育学部紀要, 52, 193-199.
- 汐見稔幸他 1998 早期教育の現状と問題点
中央教育審議会「幼児期からの心の教育に関する小委員会」週刊教育PRO 第28巻第5号, pp 37.
- 多湖輝 1978 幼児教育の潮流
横地 清ほか
討論幼児教育 日本放送出版協会
- 友利久子 1995 地域特性からみた「子ども観」について
日本女子大学家政学研究科児童学専修修士論文（未公開）
- 屋嘉比淳子 1998 女子大生の「子ども観」の地域比較―沖縄県の同胞主義的な子ども観の検討―

琉球大学教育学部教育心理学専修 卒業論文
(未公開)

付表1 発達期待の質問項目

学習面	ひらがなが読める。 ひらがなが書ける。 数を数えられる。 簡単な計算（たし算、ひき算）ができる。 簡単な絵本を一人で読み通すことができる。
生活面	時計がよめる。（15分単位ぐらいまで）。 近所のお店に一人でおつかい行くことができる。 自分の脱いだ服を始末できる（たたむ、ハンガーにかける、引き出しにしまう等）。 きまったお手伝い（テーブルにお茶碗を並べる、ゴミを捨ててくることといったこと）ができる。 1時間くらい一人で留守番ができる。
